

特集

名の由来について語る

私たちが住むこの伊予市には、この地が発祥では——と考えられる、深い係わりを持つ名前があることが分かっていた。

「栄養」と「伊予」。どちらも当たり前のように使われている名称。

この2つの名についてそれぞれ研究してきた2人に、名の由来について語ってもらった。

1 「栄養」

私たちは毎日、食べ物や飲み物、薬品などについて、テレビや新聞、その他いろいろな情報を通して、栄養についての知識を得てその大切さを知り、栄養を取り、健康的な生活を送りたいと考えています。毎日が健康でいたいのは、万人共通の願いです。

この栄養を、科学的な研究にもとづく学問として打ち立てたのが佐伯矩博士です。

そして、今や佐伯博士は、わが国の栄養学の創始者として日本のみならず世界的に知られている人なのです。

1876年(明治9年)に生まれた佐伯博士は幼少年時、両親とともに旧北山崎村本郡に移り住んできました。父は医者として、村民をはじめ多くの人々の治療にあたりました。この父と慈愛深い母に育てられ、やがて地元の鹿島小

学校―桂小学校(北山崎小学校の前身)―郡中高等小学校(米湊)―松山中学校―第三高等学校(現岡山大学)―京都帝国大学医学部と歩みしました。その後、医学の殿堂、北里研究所で細菌学等について研究。ここでは、同じ研究員であった野口英世博士と親交を深めています。

佐伯博士のいくつかの業績の一つに、社会への進出と



日下部 正盛

実践があります。決して象牙の塔に閉じこもる学者ではなく、常に実社会に進出し、震災による被災者、北海道・東北など凶作地の人々への救済、多くの恵まれない幼少年者に対する給食活動、その他多くの貧困者には常に温かい手を差し伸べ、栄養分の普及によって健康増進を図ってきました。

また、栄養についての関心



▶ 佐伯矩博士

(県立松山東高等学校発行「いのちまた燃えたり」より)



▲佐伯博士生誕地、西条市にある西条市医師会臨床検査センターには、功績を称えた像がある。

と普及に努め、国内外においてラジオ放送をはじめ、各地での講演や栄養食の実地指導を行い、人々に恩恵をもたらしました。このほか、欧米諸国への栄養指導、1921年(大正10年)には東京に世界初の国立栄養研究所を設立し、所長として研究指導に当たりました。なお、所員の中には植物学者牧野富太郎もいて、救荒植物の研究にあたっていたそうです。さらに、1924年(大正13年)には佐伯栄養学校を創立し、多くの栄養士を育成して世に送り出しました。

当時、国民病ともいわれる「脚気」「結核」などによって多くの若者の命が失われたことが、佐伯博士が研究を始めるきっかけとなり、これを救うには栄養学の研究以外にはな

いとの信念を持って、結核撲滅、ビタミン類の摂取などの必要性を訴え、その普及に尽力しました。

この佐伯博士と深い係わりを持つ「栄養」という語は、伊予市にも深い係わりを持つことが分かってきました。そもそも「栄養」は以前、「榮養」「營養」とも書かれ同義語で、生命を維持するために必要な養分を取り入れることを意味しています。すなわち「榮」は健康増進を指し、「養」は養生・療養の意味で、健康増進になる源泉の養分のことなのです。

なお、「栄養」の成語は古く、中国の晋(紀元前632年〜紀元前369年)の時代に始まり、わが国では江戸時代に杉田玄白の『蘭学事始』高野長英の『医

学枢要』貝原益軒の『養生訓』にも「栄養」の文字が使われています。また仏教上では、人間の元氣と生命への栄養は給食であり、供養の意味であるとされています。つまり、「栄養」＝給食＝供養を一連の字句とみなしています。したがって寺院には、「養」を寺号としていところも多く、松山市道後の石手寺も、元は安養寺と言ひ、灘町にある栄養寺もその一つであって、「栄養」を寺号として使っている最も古い寺院です。

栄養寺の住職、高橋宏文さんは「佐伯博士が、幼少より旧北山崎村本郡に住んでいたことがあり、現在も博士の筆による「栄養」の書がいくつに残っています。当時は「營養」と書かれることの多かったこの語が、「栄養」に統一されたことへの博士の功績は大きく、おそらく博士の脳裏には、通学途上にあつた当山の寺号が焼きついていていたであろうことは想像に難くないでしょう。」と述べられています。また、伊予市文化協会会長門田眞一さんも「郡中灘町に栄養寺という珍しい名の寺があり、博士の少年時代に親しんだこの寺号を由縁としたのではないのでしょうか。その意味



▲灘町商店街の一角にある栄養寺。佐伯博士も少年時代によくこの寺の前を通過して松山の学校に通っていたと推測されている。

で、伊予市は「栄養」の発祥地と言つても過言ではないでしょう。」と言われています。私の推測から、いずれも妥当な説と考えられます。

佐伯博士は、栄養学の研究に対する中傷・批判に屈せず、栄養を求めず不撓不屈の信念をもつて研究に専念、また、愛郷心、友情、両親や恩師への感謝の念を常に持ち続けました。

栄養学は佐伯博士の手によつて、85年前に日本で生まれた学問。世界の国々は、佐伯博士の学績と指導に倣い、今日の隆盛をもたらし、今や私たちの日常の食生活に密着して、多大の恩恵を与えています。

まさに佐伯矩博士は、健康面における人類の救済者。そして、私たち郷土の大先輩であることを忘れてはなりません。

2 「伊予」

伊予市の「伊予」、この地名は、日本最初の歴史書である『古事記』に出てきます。「国生み神話」の部分に、次のように書かれています。

イザナミ、イザナギの神様は、伊予の二名の島を生んだ。この島は、身体は1つで顔が4つある。顔ごとに名前がある。伊予を愛比売^{えひめ}と言い、讃岐^{さぬき}を飯依比古^{いひよひこ}と言い、阿波^{あわ}を大宜都比売^{おおいひめ}と言い、土佐を健依別^{けんいべつ}と言う。

「伊予の二名の島」とは、四国のことです。「二名の島」の前に「伊予」を冠したのは、朝廷が四国を統治する役所を伊予の国に置いたからです。

『古事記』に「伊予を愛比売」と言いと書かれた「伊予」、この「伊予」はどこが発祥地なのでしょうか。その由来は何なのでしょう。

これまでは、松山市にある道後温泉にその由来を求めた「道後温泉説」が多くの文献で紹介され、定説のように

なっていました。「伊予」の「よ」は温泉の湯が「よ」に転訛^{てんか}し、発語の「い」を付けて「伊予」になったという説です。ところがこの「道後温泉説」に対して、古代の地名を研究されている吉田茂樹氏が、この説は間違っていると、次のような指摘をしました。

『延喜式』という古い書物には、「伊予郡」と「温泉郡」の2つの郡名が書かれている。「温泉」が「伊予」になったというのであれば、「温泉郡」があることの説明がつかない。「伊予」の由来を、道後温泉に求めるのは間違いである。

「道後温泉説」が否定された今日、これに代わる新たな説を模索しているのが現状です。このような中、元京都芸術大学の志賀剛教授は、温泉ではなく湧水^{わきみず}にその由来を求めた「湧水説」を提唱されています。

古代人は、温泉以外に湧水も「いゆ」と呼んでいた。この湧水の「いゆ」が「いよ」に転訛し、「伊予」になったと考えられる。

また、元愛媛大学の小泉道教授は、道後が発祥地ではなく、伊予市・伊予郡辺りであるという「伊予市・伊予郡説」を出されています。

「伊予」は、四国全体の大地名であった以前に小地名としてあったもので、「国生み神話」以前からあったと考えられる。ヤマトが大和の国の中の小地名から大地名になったように、「伊予」も伊予郡（現在の伊予市・伊予郡）などである通り、もとは小地名であった。そこが、おそらく政治・文化上肝要の地であったために、一国の名となり、さらに四国の総名になったと考えられる。

この2人の考えに立てば、伊予市・伊予郡辺りで歴史的にもいわれのある湧水が出て



坪内寛

いる所、そこが「伊予」の発祥地ということになります。

この2つの条件に合致する場所を探すと、びつたりと当てはまる場所があります。伊予市

上野にある

伊予神社で

す。伊予神社の祭神は、

愛比売命^{えひめのみこと}と

月夜見命^{つきよみのみこと}で

す。『伊予』という神社

名「愛比売命」という

祭神名は、『古事記』で

「伊予を愛比売」と言いと

書かれた文面とびつ

たり合致します。さら

に伊予神社の境内には、



▲伊予小学校の近くにある伊予神社。かつては広大な境内を有していた。

祀^{まつ}っている弥光井神社^{いこうい}があり、そこからは湧水が出ています。この湧水について、宮司であった高市綏盛^{やすもり}氏が次のように書き残しています。

この地域は、山麓の傾斜地で水に乏しかったが、この靈地にのみ湧水があり、絶えることがなかった。昔から田の神様として信仰が厚かった。齋田献穀の神事は、古くからおごそかに行われ、永く伝えられてきた。

また、愛比売命について、小泉教授は「伊予の国の神靈『愛比売』は、元来、この伊予の国が「水の神」を中心とする信仰の世界と深く関わっている神である。」と指摘しています。さらに、伊予神社の近所に住む人々からは、この湧水について「弥光井神社の祠の前で、毎年、春祭りの日に子ども相撲や青年相撲を奉納していた。」とか「湧水の掃除をしていたとき、銅製の鏡が出土したので、伊予神社のご神体にした。」「この湧水で目を洗えば、目の病気が治るという言い伝えがある。」などの話を聞くことができました。以上のことから『伊予』という地名は、弥光井神社の湧水に由来すると考えていいのではないのでしょうか。



▲愛比売命を祀っている現在の弥光井神社。かつてはここから湧水が出ていた。

なぜなら、伊予神社はそれにふさわしい格式と規模を備えているからです。

1つは、朝廷が編纂した『延喜式神名帳』に載っている「式内社」になっていることです。これは中予地方に6社しかありませんが、そのうちの1社が伊予神社です。

2つ目は、朝廷から「正四位上」という神社の位を表す神階を授与されていることです。神階を授与された神社は、中予地方では伊予神社の1社のみです。朝廷は、伊予神



▲高市綏盛氏が残した「古代伊予神社復元略図」。

社にのみ特別な取り計らいをしています。

3つ目は、祭神の月夜見命についてです。月夜見命は、イザナギ、イザナミの神から生まれた天照大神(女神)、月夜見命(男神)、素戔鳴尊(男神)の3姉弟の1人です。この3姉弟に日本を3分割して統治させたことが、『古事記』に記されています。月夜見命には、現在の四国を統治させたといわれています。月夜見命が伊予神社の祭神になったのは、このことと深い関係があると思われます。なぜなら、月夜見命を主祭神として祀っている神社は、県内の「式内社」24社の中で、伊予神社の1社のみだからです。

4つ目は、伊予神社は広大な境内を有していたことで

す。かつての境内の広さが8ヘクタールもありました。「古代伊予神社復元図」を見ると、その境内を取り囲むように、表参道、中参道、裏参道の3つの参道が設けられています。これら3つの参道は、現在、市道として利用されています。市道を歩くと、広大な規模を持つ神社であることが実感できます。この広大な境内のどこかに、四国を統治する役所を置いていたのではないのでしょうか。



▲伊予神社境内西側にある勅使橋。

6つ目は、神社様式についてです。神社は普通、参道を上りつめた正面に拝殿や本殿がありますが、伊予神社の場合、社殿を南面にし、その西側に参道を設け、西側から東に進み、さらに北に向かって礼拝するといった、日本古式の神殿様式を備えています。

以上のことから、伊予神社はほかの神社には見られない高い格式と、かつて壮大な規模を備えていたことがわかります。

5つ目は、朝廷の勅使が参向したときに使用する勅使橋が現存していることです。学問の神様として有名な菅原道真が、勅使として訪れた記録も残っています。そのことに由来する手間天神社も近くに建立されています。

地名は、その土地で生活を営む人々の生産活動や自然に対する畏敬の念が込められているといわれます。「伊予」という地名は、瀬戸内式気候で雨量の少ないこの地域の人々が、水に対する願いを込めて作った地名と言えるでしょう。日本の国の誕生とともにある「伊予」は、この地の先人が地名に刻んだ貴重な文化遺産です。この由緒ある地名が、未永く存続することを願っています。